



Title	<書評> James Williams, "Gilles Deleuze's Logic of Sense", Edinburgh University Press, 2008
Author(s)	小倉, 拓也
Citation	年報人間科学. 2010, 31, p. 101-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9768
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

James Williams
Gilles Deleuze's Logic of Sense
Edinburgh University Press, 2008

小倉 拓也

はじめに

ドゥルーズの『意味の論理学』（以下「*LS*」）は、その難解さによってしばしば敬遠されてきた。日本では、多くの分野・領域へのドゥルーズ受容の興隆にもかかわらず、あまりまとまった研究はなされてこなかった。このような事態は諸外国でも同じらしく、ドゥルーズの言語論研究で知られるルセルクルは本書の序文で、「*LS*が、その精神分析や構造主義の強い影響のために、特にガタリとの共同作業以降の観点から否定的に評価されてきたと述べている」⁽¹⁾。

ウィリアムズによる本書は、このような評価にさらされてきた「*LS*」を、テクストに忠実に読み解くことで、その哲学的な意義を明確にしようとするものである。ウィリアムズによるドゥルーズ研究は、既に『差異と反復』（以下「*DR*」）の注釈書⁽²⁾によって知られており、その堅実な読解には定評がある。本書の構成は「*LS*のほぼ全域をカヴァーするものであるが、特に注目すべき点についていくらか見ていこう」。

第一に、ウィリアムズが「*LS*を一貫して分析哲学や科学哲学との対比ないしは並行関係という観点から描こうとする点が挙げられる。これは、ウィリアムズも指摘するように、「*LS*が、特にその章立てを廃した文学的な体裁のために評価が留保されてきたのであれば、その綿密な読解という点からいえば、ひとつのありうべき方向であるはずだ。おそらくこの点が本書の一番の特徴であろう」。

第二に、その概念自体はスピノザ論に由来する、ドゥルーズにおける「表現」の問題を足掛かりに、ウィリアムズの十八番である「相互的決定」[reciprocal determination]という解釈格子が全面的に展開される点が挙げ

げられる。これは他の著作にも見られるウィリアムズによるドゥルーズ解釈の骨格であるが、LSを主題にする本書においては、世界を未分化な闇から守る原理として主張されている。

第三に、精神分析の問題に比較的眞摯な注意を払っている点が挙げられる。「S」における精神分析受容の評価は、ラカン派の教義でもって肯定されるか、あるいは反ラカンの立場によって無視されるかがほとんどであるのだが、ウィリアムズはこれを正面から扱う。特にそれが「思考」をめぐる論脈で言及されることで、ドゥルーズの思索におけるその重要さが強調されることになる。

これらの是非についてはいくらかいうべきことがあるのだが、とにかくにも、まずはウィリアムズの注解の作業を、これらの点に焦点を当て、紙幅の許すかぎりで追っていくことにしよう。

I 「出来事」の存在論的地位——分析哲学との対比から

まず確認しなければならないのは、ウィリアムズが、「S」を、厳密な哲学的問題からは離れた奇妙な著作であり、論理や形式にひたすら抗うようなものであるとするような評価を、全面的に否定する点である。⁽³⁾ウィリアムズは、「S」が多くの卓越した分析・論理・科学哲学者たちと問題を共有していると強調する。もちろん、その問題に対するドゥルーズの答えは、これらの哲学者たちのそれとは非常に異なるものであるが、この共通の出発点を見誤ってはならないという。それは出来事存在論的地位についてのものである。

出来事に関する探究は、特に分析哲学に見いだされる主題である。ウィ

リアムズが整理するところによれば、分析哲学の伝統においては、事実を越えて出来事について語ることが必要であるのか否かについての議論が長く続いてきたという。その際問題となるのは、出来事は事実の集合以外の何かでありうるのか、ということである。これを踏まえるなら、出来事が哲学的な探求のテーマであるためには、それに固有の存在論的な地位が認められなければならないということになるだろう。

分析哲学においては、多くの場合出来事は事実の問題として扱われる。たとえば、「雨が降っている」という出来事は、実際に雨が降っているという事物の状態を満たすか否かという観点から、文においてその真偽が問題にされる。ここで行われていることは、出来事を事実の問題に還元し、あくまでその真偽をこそ問うということである。微妙な立場の違いこそあれ、分析哲学における出来事存在論的地位とは、事実の集合であるか、あるいは事実のひとつの種であるとされる。

こうした議論には、ウィリアムズが「形而上学的な節約」⁽⁴⁾「存在論の経済」と呼ぶものがその背景にあるという。これらは、現象を説明するための必要以上の形而上学的概念も存在論的存在者も捨てられるべきだと主張することである。このような「節約の経済学」にとつては、いかに少ない概念によって複雑な世界を簡潔に捉えるのかという関心から、出来事を事物と同種存在者と見なし、それを事実の問題として語ることが肝要になるのである。

これに対してドゥルーズは、簡潔な文へと還元するような仕方では世界を説明するのではなく、むしろ複雑な出来事からはじめて、言葉がそれを「表現」するのだと考える。ウィリアムズによると、ここでの立場の

違いは、ドウルーズのホワイトヘッドに対する傾倒があるという。ホワイトヘッドは、複雑な世界について考えるために、「節約の経済」を行うのではなく、「出来事」という概念を新たに創造した。⁽⁵⁾ デランダが指摘するように、ドウルーズは、存在者を数える存在論的コミットメントに満足せず、それら現働的な存在者を産出する潜在的な力動と強度的な過程そのものを實在的なものと捉える存在論を展開するのだから、現働的な領野に一切を還元する引き算式の「節約の経済学」をではなく、現働的なものの諸条件である潜在的なものと強度的な過程を實在的なものとして記述するための新たな概念をこそ必要とするのである。

このように、分析哲学とドウルーズとの接点は、出来事存在論的地位に関して、「節約の経済学」を行うか、出来事固有の實在性を認めるために新たな出来事概念を生み出すかという、同じ問題についての反対方向への展開として整理される。では、そのような出来事とは何であるのか、また、その現働的な側面との関係はいかなるものであるのか。

II 表現性の問題——「相互的規定」という観点から

ドウルーズによれば、出来事は潜在的なものであり、現働的な現象の条件をなし、それ自体十全な實在性を有しているとされる。潜在的であるとは、決して現働的な事物や事実には還元できないということである。現働的なものと潜在的なものとのこうした特殊な関係が明らかにされなければならぬだろう。ここでウィリアムズが重視するのが、「相互的決定」としての「表現」である。

出来事はそれ固有の實在性を認められるのであるが、しかしそれは、

現働的な側面におけるその「表現」なしでは現実存在しないとされる。ドウルーズによると、表現されるものは、それを表現するものと同じではなく、また似てもいないのだが、前者は後者を外れては現実存在しない。これを「S」の文脈に引き寄せると、潜在的なものとしての出来事は、それを表現する現働的な事物の状態および命題の言葉とは同じではなく、また似てもいないのだが、表現されるものとしての出来事はそれを表現する事物や命題を外れては現実存在しない、といえるだろう。

ドウルーズ自身による表現性の議論は、プラトン主義やアリストテレスの体系が不可避免的に孕む階層秩序を退け、一義的な存在論を展開することに存するのだが、ウィリアムズはこれに加え、「相互的決定」としての「表現」が、潜在的なものが未分化な闇として沈み込んでしまうのを避けるために不可欠なものであると考えている。⁽⁷⁾ ウィリアムズは本書で「ドウルーズにおけるいかなるもの……」二つの側面の過程を持つ⁽⁸⁾ という観点を貫いており、ここでは現働的なものと潜在的なものとの二つの側面が相互に決定し合うことで、この世界の意味が守られるとされるのである。そのため、ウィリアムズは、「S」における未分化な闇としての深層の身体を肯定的には語らない。それは、精神分析について正面から扱った記述においても一貫している。

III 精神分析受容——思考、無意識、偶然

ウィリアムズは、ドウルーズにおける精神分析受容の意義をもつば「思考と無意識」を描くことにあると考える。思考の問題は前期ドウルーズにとって重要な場所を占めており、そこで思考とは主体の為す能動的

な行為ではなく、何かに強いられるものであるとされる。それは主体の意識的な統轄の領分ではなく、根本的な無意識性を抱えていることになる。

LSにおけるラカンの援用は、もっぱら『盗まれた手紙』についてのセミネール⁹からのものであるが、その核心をウィリアムズは、「思考」を主体の統轄を超える偶然のゲームのうちに位置づけることにあとと考える。そこでは、ドゥルーズが強調する「意味」の「中立性」「非情性」と、ラカンが強調する象徴秩序の自律性とがパラレルに論じられる。「善意は当然にも罰せられる」という第12セリーの謎めいたフレーズも、このように、意識的な思考に対してその結果が必ずやそれを裏切るという偶然の問題に関連させられ、「去勢」もそのひとつのバージョンであるとされるのだ。

次いで、動的発生論とそこでのクライン受容についても言及される。動的発生とは、ドゥルーズによれば身体の混在から非物理的な出来事へと向かう発生であるとされる。¹⁰ウィリアムズは、ここでも「相互的決定」の観点から、これを、現働化された事物の状態がそこで固定されて終わらず、非物理的な意味の領野において変化し続けるための原理であると解しており、LSが唯物論と自然主義とを共に拒否すると主張する¹¹。クラインにしたがい記述される口唇性の議論も、食べるという身体的混在の領野から、話すという非物理的な領野への解放という文脈で解される。このように、ウィリアムズは、もっぱら身体的混在からの離脱という観点からドゥルーズの精神分析受容を理解し、その限りでそれらを肯定的にとりだしているといえるだろう。

いくつかの検討

以上確認したとおり、本書に一貫しているのは、ドゥルーズ哲学を潜在的なものと現働的なものの二つの側面によって特徴づけ、それらの「相互的決定」を強調する点である。この概念が軸となりすべてが説明されるといってもよい。こうした解読図式はクリアではあるが、批判的に指摘すべき点もいくつかある。

まずウィリアムズの読解と解説を集約する「相互的決定」であるが、驚くべきことに、これはその語の使用においてまったく誤っている。というのも、ドゥルーズ自身は、未分化ではあるが十全に規定されている〈理念〉の、その規定のされ方としてこの「相互的決定」という概念を用いているからである。すなわちこの概念は、〈理念〉的な審級が *mix* という仕方では差異化されている仕方を指しているのである。¹²ウィリアムズはあくまで、潜在性／現働性という分かりやすい図式におとし、ドゥルーズを読もうとし、それはドゥルーズ哲学の構図をつかむためにいくらか有益ではあるのだが、このような明らかな概念の誤用についてはそれが彼のドゥルーズ解釈の骨格となるがゆえに、修正されなければならないだろう。

さらに指摘すべきは、精神分析と動的発生論についてである。先述のとおり、彼はラカンをドゥルーズと同じく「思考」を偶然性の領域へと導いたとしているが、両者の間にある偶然性をめぐる決定的な差異を峻別できていない。『盗まれた手紙』についてのセミネール¹³は、確かに象徴界の優位について語っているが、そこで持ちだされるマルコフ連鎖

よって結論されるのは、いうまでもなく象徴界の「必然性」についてである⁽¹³⁾。また、ドゥルーズにおける偶然性の問題は、マラルメ的な賭けと連関させられる一方でパスカル的な賭けを拒否するのだが、ラカンが象徴界の必然性と〈大他者〉への信を担保する際に好んで用いるのは、「世界の意味のすべて」を賭け金としたパスカル的な賭けである⁽¹⁴⁾。すなわち、ラカンにおいては〈大他者〉は、それが無ければ世界の意味の一切が失われる、信じるほかにないものであり、そこで必然的な象徴界が必ずや担保されるのである。

そして、ウィリアムズが、クラインを用いた動的発生論の記述をひたすら身体的混合からの離脱に帰していることについて、これは早計だといわなければならない。このことはドゥルーズがラカンと訣別する決定的な一点に関わっている。ドゥルーズは補論において「他者なき世界」を描くのだが、それは「〈大他者〉の〈大他者〉はいない」がゆえに〈大他者〉をパスカル的に信仰しなければならないというラカン派の原理に対して、その「秘密」を暴こうとすることにほかならない。すなわち、前エディプス期を描くクライン受容において読みとるべきなのは、〈大他者〉と象徴界がないと想定される世界での、知覚システムや欲望の唯物論化であり、エレメンタルな身体の倒錯的な多形性である⁽¹⁵⁾。

他にも指摘すべき点はある。たとえば、ラカンを用いながら「思考」について語る場面で、その開始をしるしづける「去勢」の役割を低く見積もっている点⁽¹⁶⁾。等々……。

とはいえ、もはや紙幅が許されていない。これらについての詳細な展開は、別の機会にわれわれの責任においてなされなければならない。

このように、たったい多くの指摘を行ったウィリアムズの注釈書であるが、その愚直なまでの定式化の努力がなければ、われわれはその批判的指摘から始めてわれわれの思索を展開することさえできなかったはずである。そして、ウィリアムズが意図したのはそうした定式化の作業であるのだから、これ以上の注文は不当である。繰り返すが、ここから先はわれわれの仕事なのである。

註

- (1) Jean-Jaques Lecercle, "Preface", in James Williams, *Gilles Deleuze's Logic of Sense*, Edinburgh University Press, 2008, p. vii.
- (2) James Williams, *Gilles Deleuze's Difference and Repetition*, Edinburgh University Press, 2002.
- (3) Williams, *Gilles Deleuze's Logic of Sense*, p. 53.
- (4) Williams, *ibid.*, p. 87.
- (5) Williams, *ibid.*
- (6) Manuel Delanda, *Intensive Science and Virtual Philosophy*, Continuum, 2002[2004], pp. 4-5.
- (7) Williams, *Gilles Deleuze's Logic of Sense*, p. 71.
- (8) Williams, *ibid.*, p. 179.
- (9) Williams, *ibid.*, p. 188.
- (10) Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969, p. 217.
- (11) Williams, *Gilles Deleuze's Logic of Sense*, p. 196.
- (12) Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, PUF, 1968, p. 222.

(13) Jacques Lacan, *Écrits*, Seuil, 1966, pp.47-53.

(14) 一年をとおしてパスカルへの言及を行っている Jacques Lacan, *Le séminaire, Livre XVII : D'un Autre à l'autre 1968-1969*, Seuil, 2006 を参照。

(15) 以下の「エレメント」という概念については以下の論考を参照。Alphonso Lingis, "Deleuze on a deserted island", in *Philosophy and Non-Philosophy since Merleau-Ponty*, ed. Hugué J. Silverman, Northwestern University Press, 1988. 並びに「多形性」という概念(およびその「倒錯」概念との区別)については以下の論考を参照。Catherine Malabou, "Polymorphism never will pervert childhood", in *Derrida, Deleuze, Psychoanalysis*, ed. Gabriel Schwab, Columbia University Press, 2007.

(16) ここでは詳述できないが、この点については「隠喩」という観点からさらに展開できるように思われる。ラカンにおける「原抑圧」とデイヴィッドソンにおける「根元的解釈」をパラレルに論じた、上野修「言語習得における原抑圧と真理——デイヴィッドソン、ラカン」『山口大学哲学研究』(第八巻)、山口大学哲学研究会、一九九九年を参照。また、ラカンにおける「思考」の開始と「隠喩」との関係については以下を参照。Jacques Lacan, *Le séminaire, Livre V : Les formations de l'inconscient 1957-1958*, Seuil, 1998, pp.175-176.